

# 一郎&ミツエ奨学基金 設立趣意書

基金寄付者 戸塚 博明

この基金は、父・一郎、母・ミツエが遺した僅かな遺産により創られたものです。この基金の対象者は学業維持が困難な生活困窮大学生を対象にしたもので、その生活支援を目的とした小規模な基金です。この僅かな援助を受けとることによって、少しでも大学生の学業の維持が支援できたらと思っています。

最初に、この基金の原資を築いた父・一郎と母・ミツエのことを、少しだけ述べさせていただきます。

父・一郎(1920-2015)は、その青春時代を満州でおくり、母・ミツエ(1918-2007)は、生まれてから二十年あまりを樺太で過ごしました。二人は戦争がはじまる前に日本へもどり、東京の浅草橋で居を構え、長屋が隣合った縁で結ばれ、家庭を築きました。二人とも父親をはやくから亡くし、その生活は決して楽なものではなかったといえます。

親類縁者の援助も受けられず、それぞれに抱えた親兄弟の面倒まで見なければならず、長屋の一軒を妹夫婦と階下と二階でわけあい、小さな幼子を抱え、戦中、戦後の困窮な時期をなんとか乗りきりました。

また、父も母も外地で育ったために十分な教育を受けさせてもらえませんでした。父は大学へ行くことができませんでしたし、母に至っては貧しさから小学四年までの学業経験しかありません。二人ともに学校生活に未練を残し、社会人としての生活を余儀なくされたのです。二十歳を越えたばかりの年頃でした。

父の人生は、一介のサラリーマンとしての平凡なものでした。そして母もまた、主婦として平凡な人生をおくりました。ただ、その平凡な人生のなかには、庶民としての誰もがおくる、人の一生の山や谷があり、確かな二人の戦中・戦後の、密度の高い生き様があったように思います。

二人の生活は、浪費、豊饒、墮落という言葉とは無縁な堅実質素なもので、新聞記者であった父は理想肌でしたが、大正インテリの弱点も同時に抱えていたように見え、母は学問こそありませんでしたが、明るく愛情深い女性で、一家の大黒柱的な存在でした。そこには貧しいながら、戦後の昭和二十年代、三十年代、四十年代の確かな家庭と家族があったように感じられます。

敗戦下に一家をなした父や母の世代の目指すところは、なによりもまず家庭・家族の構築でした。敗北と破壊から立ち直った人々には、私たち子の世代に比べ、平和や平穏な日常を守る確固たる信念があったように思います。東京下町の戦火のなか、二歳の兄を背に負い、お腹には私を宿し、わが身ひとつでぐり逃げた体験が、戦後の平凡な日常をしっかりと生き抜く強さをもたらしたのでしょう。

その一方で、父母世代は貯蓄にも励みました。貧しさのなかで育てられたことと、欲望は抑圧され、富を消費することをあまり知りませんでした。高度成長下で蓄えた富をひたすら子へ、子孫へ回すことが、この世代の幸福感情を満足させていたように思えます。日々の労力を重ねて稼いだ僅かな蓄えを、ひたすら子へ残そうとしたのです。

この基金の原資は、そうした父・一郎と母・ミツエの戦後の過酷な生き様のなかから創られたものです。

ところで、親が遺した資産は普通であれば、その子へ、また、その子から孫へと、係累に沿って流れていくのが自然というものでしょう。その流れに身を任せていける者なら、今回のこの基金を創る必要もないわけです。ただ、残念ながら、私にはその渡すべき子や孫がおりません。

そのうえ私自身、齢(よわい)七十歳になろうという老人です。千葉の片田舎で一人つつましい生活を送っています。今回、国の生活援助支給対象者になっていますが、別に生活が苦しわけではありません。とって親の遺産を使ってまで、いまの自分の質素な生活スタイルを変える気もありません。そんな生き方を変えるような真似をしたら、これまでの自分の生き方に誇りが持てなくなります。父と母の遺産はいまの自分には余分なものになっています。

ただ柔軟な思考をもって目を転じて観れば、父母の遺産を受け継げる子や孫は、周りにいくらかでも存在しているわけです。なにも自分の子や孫に限る必要もない。支援を切実に必要としている子供らは大勢いるわけです。父母の遺産をそちらに回したとしても、父母も反対はしないでしょう。

このような遺産の使い方も許されるのではないか。なにも立派な墓や葬儀や法事を執り行うことだけが、親の供養

というものでもないと考えました。

この「一郎&ミツエ奨学基金」はこうした経過をたどって生まれたものです。

さて今回、私が基金を創設することとしたのは、実は別のもう一つ大きな理由があります。それは私個人のこだわりからです。

ちょっと大きなことを言いますと、現在、日本には一千兆円を優に超える借金があります。国民一人当たりで換算すると、一千万円を超えています。そしてその借金はなお増大する一方です。

この借金を返済するのは、いまの若い人達や子供達です。大人達に返済する気はまったくありません。返す気のない大人達が、しかも返済義務を負わされている若者達や子供達の了解もないまま、勝手にどんどん借金を増やしている。これは立派な犯罪ではないのか。ただ裁くだけの法律がないだけで、私にはこんなことが許されることが不思議でなりません。そんな大人が、その一方で、若者や子供達へ、道徳や愛国の情を説くとは・・・。

いまの大人達には、この借金が自分の借金だという自覚がない。とくに、この借金を発生させている政治家、官僚、地方自治体、援助団体、経済界、つまりこの日本を動かしている指導者とされる者たち、そのおこぼれに与かろうとする一部の国民、この者たちが自分達の行いを悔いて、あるいはその責任をとって、個人的に借財を返金したなどという話は聞いたことがない。豪勢な葬儀を挙げるくらいなら、そのぶん自分の借金分ぐらい返してから死ねと言いたい。それこそが道徳であり、愛国心だろう。

ただそうは言っても、国の指導的立場にいないわれわれ名もない一般の大人達も、まったくその責任がないかと言ったら、そうも言えません。とくに、若者や子供達を前に胸を張ってそう言えるか。何もしないことが、何かをすることより、悪い結果を招くことはよくあることです。日本人の誰もが背負っている借金を、返すことが可能な者は、やはり返していくのが筋というものだと思うので。「一郎&ミツエ奨学基金」は、こうして決まりました。

## 奨学金受給者へのお願い

この基金には今一つの目的・目標と、支給対象者に対するお願いがあります。それは70年前に日本人が体験した太平洋戦争を考え、学んでいこうというものです。その勉強を大学生と一緒にやって行いたいと思います。

太平洋戦争について特に私が詳しいわけではありません。体験もしていません。その点では学生の皆さんと私は対等です。ただ、敗戦ということに関しては、私には若干の体験があります。幼いことの体験で記憶もおぼろげですが、でもその僅かな実体験が、私の戦後を生きた原点になっています。

父母の生き様の中でも述べましたが、父母の世代には戦争に対する揺るぎない確信があったように思っています。それは言葉で概念化する必要もない実体験の強さです。決してぶれることない信念でした。

それに比べ、その後の戦争を知らない世代の私たちには心の緩みがあったように思います。あの戦争の大量の死と、破滅と敗北、悔悟と苦悩に十分に対峙してこなかった、あるいは自分の生き様の糧としてしっかりと身に付けてこなかった、その付けが今回ってきたような気持がしています。

そこで、それらのことを考える勉強会を年に三回程度千葉市近辺で開催したいと思いますので、ぜひご参加いただきたいのです。一の問題定義やテーマはこちらから提出させていただきます。レポートの提出、討論、施設見学等を考えています。ただ、学問をするような硬いものにはならないでしょう。

戦争とはどういうものなのか、戦争は私たち一般人にどんな影響を与えるのか、戦争を避けるためにはどうすべきなのか、70年前に実際に戦われた太平洋戦争を通して考えていきたいと思います。

学業報告を兼ね、年三回程度、お茶でも飲みながら、話をしたいと思います。

また、これもこちらからのお願いですが、四年間の受給期間中に一度でよいですから、高崎にある父母の墓参りに付き合ってもらえたらと思います。

2021年9月吉日